

英語

京都大学 (前期)

<全体分析>

試験時間

120分

解答形式

記述式 一部客観式空欄補充

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・**やや減少**・変化なし・やや増加・増加)難易 (易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

読解総合：英文和訳に加えて2019年度以来久しぶりに空欄補充問題が出題された。

英作文：和文英訳は例年通り。自由英作文は2019年度と同じく大問Ⅱに組み込まれる形となり、80語から100語という語数指定を伴うものとなった。

その他トピックス

読解問題においては、2年続けて内容説明問題は出題されていない。

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	英文解釈	「creativity」 (686 words)	(1) 1文目の its は creativity を指す。making 以下は分詞構文で making (V) it(O) an infant(C) という構造。as far as words go は「言葉としては」の意味。2文目の goes back a bit further は「若干歴史をさかのぼる」の意味。in an inconsistent kind of way は rarely と並列して were used に接続し、「一貫した使われ方をしていない」の意味。3文目の articles 以下 anything of the sort までが並列関係にあつて dealing 以下がそれを修飾している。全般的に構造的に難しいところはない。 (2) アは ingenuity を知っており、かつその言い換え表現であることがわかっていれば難しくないが、知らない場合でも、直後の too utilitarian がヒントにはなる。イとウは while によって対比的に用いられていることがヒント。その上でイは too exclusive and grandiose, ウは a little too pedestrian がヒントとなる。ここでの pedestrian は commonplace の意味。エは直後に the term most often used interchangeably with creativity とあるので容易に imagination だとわかるだろう。 (3) 1文目は Just as S ₁ V ₁ , S ₂ V ₂ の形。主節の manage to exist as... は「...として何とか存在しうる」の意味。mental と material ; playful と practical ; artsy と technological ; exceptional と pedestrian がすべて対比的に用いられているので訳語を工夫する必要がある (特に pedestrian)。2文目は constellation に文脈に沿った訳語を充てることが求められる。in which 以下は postwar America を先行詞とする。	標準

			出典 : Samuel W. Franklin , <i>The Cult of Creativity: A Surprisingly Recent History</i> ; 2023.	
II	英文解釈	「マーケティングにおけるセグメント化」 (528 words)	<p>「マーケティング」や「セグメント」など、非常に現代的なトピックを扱った文章で、読解問題の中に自由英作文の設問が組み込まれたという形式面だけでなく、文章のテーマの面でも 2019 年度の京都大学入試に近い。自由英作文以外の設問は下線部和訳問題のみであったが、下線部の構造自体はさほど複雑ではなく、一定の語句の知識を前提とした上で、一部日本語として表現しにくいものを、文脈を踏まえながら自然な日本語に置き換えていけるかが問われている。</p> <p>(1) 1 文目では to pursue が形容詞用法の不定詞句で a segment を修飾していること、そして that we ... attend, etc. が a segment を先行詞とする連鎖関係代名詞節であることが理解できていたかどうか最大のポイント。2 文目は propensity が難しい単語だが、our efforts を集中させる対象がどのような人々であるのか考えて推測してほしいところ。なお、segment はここではマーケティング用語として使われており、日本語でもカタカナ語として用いられるのが普通であるため、答案でもカタカナ語で処理するのがよいだろう。</p> <p>(2) 文頭にある They が前文の Segments を指していることを把握するのは大前提。その上で、that marketers create と where people ... to do がいずれも a construct を先行詞とする関係詞節であることを見抜いて訳出する必要がある。a rough substitute は訳しにくい、第 3 段落最終文で shortcut characteristics とパラフレーズされているところに気づくと訳語の方向性が定まったかもしれない。</p> <p>(3) 2019 年度にも出題のあった読解問題中に組み込まれた自由英作文の出題。「実際の人間はきちんとした小さな箱には当てはまらない」と言える理由を、本文中にない具体例を挙げながら説明する問題。本文中の具体例は最終パラグラフの「ミニバンに乗っているデボラは～な人だ」という例で、これに即した形で例を挙げて理由説明することもできれば、それとは異なる形で例を挙げて説明することもできる。</p> <p>(4) Sounds about right, right? ; here's the thing ; I might add といった口語的な表現、あるいは data point の意味がつかみにくかったかもしれないが、この段落で示された具体例全体の内容を踏まえながらそれぞれの意味合いを推測することが求められている。なお、cognitive fluidity は「認知的流動性」などと訳される専門用語。</p>	標準

			出典：Marcus Thomas Collins, <i>For the Culture: The Power Behind What We Buy, What We Do, and Who We Want to Be</i> , 2023.	
Ⅲ	英作文	「学ぶとは」	2023 年度と比較すると問題文自体はやや長文の出題であるが、構造面でも単語面でも比較的処理しやすい出題である。その意味で、これまでの学習で身につけた力がそのまま解答に反映するような問題であるので、基本的な事柄をきちんと身につけた受験生は高得点が望め、そうでない受験生との間に差をつけられる問題ではないだろうか。	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

読解問題では今年度は英文和訳問題と空欄補充という出題となったが、この傾向が次年度以降も続くかはまだわからないので、今後とも、内容説明問題も出題される可能性を考慮に入れて、和訳だけに偏らずバランスの取れた学習を心がけること。内容説明問題では、該当箇所をどこまで正確に読むことができるか、そしてどこまでを解答に盛り込むかが問われる。英作文では大問Ⅲは英訳問題で定着した。過去問の英訳問題の練習を含め、各人の実力に合わせた演習を積む必要がある。自由英作文問題は、昨年度が会話文下線部補充問題、一昨年度が意見論述型、その前年度が会話文下線部補充問題、その前年度が手紙の形式、その前年度が本年と同じく英文に絡めた意見論述型…と、形式が固定されていない。今後も形式が変わる可能性は十分にあるので、さまざまな形式の問題に触れ、実際に答案を作る演習をすることをすすめる。